

國學院大學學術情報リポジトリ

和文学のなかの朱買臣関連話に関する一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍾, 薇芳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001583

和文学のなかの朱買臣関連話に関する一考察

A Study on Stories of *Zhu Maichen* in Traditional Japanese Literature

鍾薇芳

キーワード：和漢比較 朱買臣 蒙求 買妻恥醜 衣錦

关键词：中日比较 朱买臣 蒙求 买妻耻醜 衣锦

要旨

本稿は中日両国の古代文学作品を『漢書』の朱買臣の伝と比較する。中国作品の場合は時代が下ると共に見える展開と変化を、日本作品の場合は本場の中国の作品よりもさらなる受容と変容があることを考察した。両国における朱買臣関連の話をも5種類に大別し、それぞれ：①薪を負いながら勉強する話、②晩年出世の話、③衣錦帰郷の話、④元妻が再婚を恥じて自害した話、⑤元妻が貧しかった朱買臣の富貴を見て恥じて／悔いて死んだ話、である。そのなかの⑤は日本文学のなかの和文学に見える話であり、③の「衣錦」を出世よりも「富貴」に解釈した結果である。「衣錦」が特に和文学のほうで重要視され、朱買臣と結びつき、散文のみならず、和歌や俳諧まで影響を及ぼしている。

摘要

本文通过比较中日两国古典文学作品与《汉书·朱买臣传》的异同，考察中国作品随时代变迁产生的发展和变化，以及日本作品在接受从源头中国传来的朱买臣相关故事以后，进行的进一步加工和改编。通过考察，可以将两国的朱买臣相关故事归为5类：①负薪读书；②大器晚成；③衣锦还乡；④前妻耻再婚自缢；⑤前妻悔/耻于抛下贫穷时代的朱买臣自缢而死。其中⑤是日本文学，特别是和文学中特有的故事，是将③的“衣锦”专门解释为“变富贵”的结果。“衣锦”在和文学中受到很大的重视，并一直与朱买臣相关联，散文、和歌、俳谐均如此。

はじめに

朱買臣は中国の前漢の人であり、彼にまつわる有名談は幾つかある。日本で現在でも特に有名なのは、薪を負いながら読書する朱買臣の姿である。江戸時代には、それが二宮金次郎像に生まれ変わり、絵にも描かれ、小学校に置かれている⁽¹⁾。その話が流行した一番の要因は、中国の明代『日記故事』の日本に

における流行と関わると推測できる。長澤規矩也によれば、日本では明人編纂の故事熟語解説の漢籍が、特に江戸時代に流行し、文章を作撰するときの参考書として、又、古典を理解するときの必読書として流通したという⁽²⁾。『日記故事』において、朱買臣に関連の話の内容は、

朱買臣字翁子家貧。賣薪自給。行歌誦書。妻羞之求去。買臣曰。汝苦日久。我富貴當報汝。妻怒曰。如公等終餓死溝壑中矣。買臣不能留。聽自去。年五十為会稽太守。擊破東越。衣錦還鄉。

と、朱買臣にまつわる有名談①薪を負いながら読書する話（賣薪自給。行歌誦書）、②晩年出世の話（年五十為会稽太守）、③衣錦帰郷の話（衣錦還郷）の3つが含まれている。だが、『日記故事』において朱買臣に関連する故事の題名は「賣薪讀書」であり、「学知類」に分類されるため、明代に本場中国では一番周知されるのは「賣薪讀書」であり、中国の故事を輸入した日本でも、特に①番が有名になったのは理解できなくもない。

しかし、それだけが日本における「朱買臣」の全貌とは言えない。本稿において、時代を遡り、古典文学に見える朱買臣関連の内容を考察し、日本文学、特に和文学におけるより完全な「朱買臣」談を再現してみたい。

1. 『漢書』の朱買臣の伝と後世の朱買臣談とのずれ

まずは史実から出発し、歴史のなかの真の朱買臣の全貌を見てみたい。朱買臣に関する正史の記録は『漢書』卷六十四上「嚴朱吾丘主父徐嚴終王賈傳第三十四上」であり、そのなかの「朱」は朱買臣のことを指し、その生涯についての記録が見える。

…朱買臣字翁子，吳人也。家貧，好讀書，不治產業，常艾薪樵，賣以給

(1) 岩井茂樹、「二宮金次郎『負薪讀書図』源流考—『朱買臣図』からの展開—」、『日本研究』、2007年第9号、P11。

(2) 長澤規矩也、『和刻本類書集成』第三輯、汲古書院、1977年、解題。

食，擔束薪，行且誦書。其妻亦負戴相隨，數止買臣毋歌嘔道中。(1)買臣愈益疾歌，妻羞之，求去。買臣笑曰：「(2)我年五十當富貴，今已四十餘矣。女苦日久，待我富貴報女功。」妻恚怒曰：「如公等，終餓死溝中耳，何能富貴？」買臣不能留，即聽去。其後，買臣獨行歌道中，負薪墓間。(3)故妻與夫家俱上冢，見買臣饑寒，呼飯飲之。後數歲，買臣隨上計吏為卒，將重車至長安……召見，說春秋，言楚詞，帝甚說之，拜買臣為中大夫……(4)上拜買臣會稽太守。上謂買臣曰：「富貴不歸故鄉，如衣繡夜行，今子何如？」買臣頓首辭謝。詔買臣到郡，……(5)買臣衣故衣，懷其印綬，步歸郡邸。直上計時，會稽吏方相與群飲，不視買臣。買臣入室中，守邸與共食，食且飽，少見其綬。守邸怪之，前引其綬，視其印，會稽太守章也。守邸驚……相推排陳列中庭拜謁……(6)會稽聞太守且至，發民除道……入吳界，(7)見其故妻，妻夫治道。買臣駐車，呼令後車載其夫妻，到太守舍，置園中，給食之。(8)居一月，妻自經死，買臣乞其夫錢，令葬。悉召見故人與飲食諸嘗有恩者，皆報復焉……⁽³⁾

以上は『漢書』朱買臣の伝の一部であり、8箇所の下線した部分について一つずつ見ていく。まず朱買臣は読書好き、貧乏で、家業を持っていなかったにも関わらず、(1)薪を負い読書をしながらも大声で歌っているため、同行の妻が恥じて離縁を求める。朱買臣のほうはそれを恥じとも思わず、笑いながら、(2)自分は五十になると金持ちになり、その時になったら妻の功に報じると言った。その妻は聞かず、買臣を去り、(3)再婚の夫と一緒に饑寒した買臣に御馳走した。後に買臣は上京して官になった。その後買臣は、(4)漢の武帝に「富貴になって帰郷しなかったら、繡を着て夜を歩くようだ」と言われ、帰郷せよと命じられ、会稽太守に遷った。帰郷のとき買臣は最初、(5)元の服を着て、太守という身分を隠していた。その身分が知られてから、会稽が太守歓迎のため、道の掃除や修理を庶民にさせ、(7)買臣の元妻とその夫も道の掃除をしていた。買臣が元妻とその夫の二人を自分の官舎まで招待し、泊めてあげ、(8)一か月後に元妻が自害した。そのあとも朱買臣の伝が続いているが、有名な故事とほぼ関連してい

(3) 『漢書』、中華書局、1962年、P2791 - P2793。

ないため、ここでは割愛させてもらいたい。

下線部の8箇所は全て後世流行した故事とずれがあるところである。まず、上述の『日記故事』と比べると、最後の「衣錦帰郷」と(5)と違うことが分かる。朱買臣が会稽に帰る際に、最初は錦を着ておらず、「故衣」を着ていたのである。繡を着て帰郷することなどは、そもそも正史に見えず、最も近いのは、(4)の漢の武帝からの言いかけに、「帰郷」と「衣繡」の二語があり、恐らくその組み合わせによって「衣繡帰郷」という言葉が成り立ったのであろう。

また、「衣繡帰郷」という言い方は朱買臣のところでは最初ではない。すでに『史記』卷七「項羽本紀第七」において、

項王見秦宮皆以燒殘破，又心懷思欲東歸，曰：「富貴不歸故郷，如衣繡夜行，誰知之者！」⁽⁴⁾

つまり、項羽が秦宮を焼き滅ぼしたあとに自分に言いかけた言葉である。しかし、後世において、初出の項羽よりも朱買臣をそれと結びつけることが多いらしい。『文心彫龍』卷九「時序」に、

買臣負薪而衣錦。相如滌器而被繡。⁽⁵⁾

とあり、既に南北朝時代から「朱買臣が錦を着」ていたように、しかも「衣繡」から「衣錦」に変わって広がったと分かった。

また『懷風藻』所収の藤原宇合の五言詩「悲不遇」に、

學類東方朔。年餘朱買臣。⁽⁶⁾

とある。自分は東方朔のようにたくさん学び、朱買臣が出世する年よりも超えているのに、なかなか認められないことを悲しんでいる気持ちを詠んでいる。

(4) 『史記』、中華書局、1959年、P315。

(5) 劉勰著、『文心彫龍』明嘉靖刊本、『四部叢刊』初編より。

(6) 『懷風藻』、日本古典文学大系、岩波書店、昭和39年、P154 - P155。

藤原宇合は737年、44才に没したとされているが、朱買臣が出世した50才を超えるはずがない。それは朱買臣が大器晩成の比喩になり、自分は大器晩成さえもできないとも考えられるが、ほかにも理由があるはずである。

『蒙求』は唐李瀚編纂の幼学書であり、上述の『日記故事』のように、故事の中心部分をまとめ、簡単に把握できる便利な書物と言える。正文は4文字ずつで1句になり、古人1人の故事を1つ伝える。2句ごとに対になり押韻し、韻で全文が排列されている。従来から『蒙求』の注釈書が幾つかあった。注釈によって故事がより完全に伝えられ、話の中で、正文4文字に対する補足がなされている。『蒙求』にも「買妻恥醜」という朱買臣に関する故事が見える。日本に平安末期に写した古注本が残され、李瀚の自注本とされる。内容は、以下の通りである。

漢書朱買臣、百（ママ）字翁子、會稽人。家貧耽學、不事産業、其妻求去。買臣謂妻曰：「予年卅當貴、今卅九。」妻不聽、遂去。明年、長安止（ママ）書武帝、拜為侍中。上謂買臣曰：「富貴不歸故郷、如衣繡而夜行。今子如何。」後遷會稽守。妻与後夫聞太守至、治道。臣識之、命車載、歸給衣食。妻恥媿而死。⁽⁷⁾

買臣が妻に言った富貴の年齢は40才で、当時39才であった。李瀚の自注は藤原宇合の年齢と合致する。『蒙求』が日本に伝わった確実な時間は未だ明らかではない。藤原宇合の場合は717年に遣唐使として入唐し、『蒙求』編纂の時代と一致している。だが、当時、中国で『蒙求』が流行したかどうか確認できない。そのため、李瀚自身の覚え間違いか、当時では朱買臣出世の年齢に関して40才説もあった可能性も考えられる。いずれにしても、朱買臣出世の年齢に関して正史とずれがあり、さらに、日本にも伝わり影響を与えたことが確認できる。

もう1つのずれは元妻自害の理由である。『蒙求』古注の場合は、はっきりと「妻恥媿而死」と記し、さらに正文を「買妻恥醜」とし、その元妻が貧乏で

(7) 『蒙求古註集成』上巻、P61 - P62。

あった朱買臣を捨てて再婚したことを恥じて自害しているとした。『漢書』の場合は、(8)元妻が新しい夫と朱買臣の官舎に一月住んでから自害したと記し、その理由を明記していない。唯一「はじる」と出てきたのは、(1)貧乏である朱買臣が薪を負い読書をしながらも大声で歌うことを「はじる」ところである。ゆえに、『漢書』から確定できるのは、妻が恥じるので離縁したという記述のみである。それに対して再婚を恥じることは確定しにくい。

以上、『漢書』朱買臣の伝の(1)(2)(4)(5)(8)と後世の朱買臣談とのずれについて述べた。ゆえに、中国では、すでに朱買臣に関する有名談である「②晩年出世の話」に年齢のずれが見える。さらに「③衣錦帰郷」の箇所は、元々項羽の故事から取った言葉を漢の武帝が朱買臣に言い、更なる違いによって後世が作り出した正史に存在しなかった話である。また「①薪を負い読書する話」をその妻の立場から出発し、恥じて朱買臣を捨てて再婚し、最後に自害したなどと合わせて「④元妻が再婚を恥じて自害した話」が誕生したと言える。中国文学のなかにも時代が下ると共に、すでに朱買臣談に「受容」と「変容」が見えるので、日本に伝わってからの状況も推測できよう。

2. 和文学における朱買臣関連話の受容と変容

以上、中国文学のなかに、すでにできた朱買臣談と正史とのずれを述べたが、むしろ日本文学においても、そのずれは伝わり、また、中国文学には見えないアレンジも生じていた。上述した『漢書』の朱買臣の伝に見える(3)(6)(7)は、中国で後世の談にはあまり見えないが、やはり日本文学ではアレンジが見え、更なる受容と変容を遂げた。

まず、『唐物語』において、朱買臣関連の話が見え、それは第十九の「朱買臣を捨てる妻、後に悔みて死ぬる語」であり、以下に記す。

むかし、朱買臣、会稽といふ所にすみけり。よにまづしくわりなくてせんかたなかりけれど、ふみをよみ物をならふ事をこたらず、そのひまにはたき木をこりて、世をわたるはかりごとをしけり。かくてとし月をふるに、あひぐしたりける女、かぎりなくまづしきすまひをたへがたくや思ひけん、

「我もひとあらぬさまになりて、世をこころみむ」など、こまやかにうちかたらひければ、「かくてしもやありはつべき。ことしばかり、心づよくあひ念ぜよ」と、よろづこしらへけれど、つゐにきかでそのとしのうちにはなれにけり。

夫こひかなしめども、いふかひなくてつぎのとしにもなりぬるに、この人の才学、よにすぐれたる事をみかどきかせ給て、その国の守になされぬ。はじめてくにくだりけるありさま、心こと葉もをよばずめでたかりけり。かかれども、なをありし妻の事を心にかけて、ひと国のうちをたづねもとめさすれど、にたる人なくてあかしくらす。そのにいでて、かりしあそびける時、事もなのめならず、あやしくわびしげなるしづのめが、かたみといふ物をひぢにかけて、なをつみてゐざりありくを、「ゆゝしげなるものすがたかな」とみる程に、我むかしのともに見なしてけり。なをひがめにやとめをとめてみけるに、いかにもたがふ所なかりければ、ひとしれずかなしくおぼえて、くるゝやをそきとよびとりてけり。女、「我あやまつ事もなきに、いかなる事にあたりなんするにか」とおそれまどひけれど、ありしむかしの事などをこまやかにかたらひければ、女あさましく覚て、この夫をうちみるより、いかがおもひけん、いたくなやみわづらひて暁がたにたえ入にけり。

もろともににしきをきてやかへらまし

うきにたえたるこゝろなりせば

心みじかきは、なにごとにつけてもうらみをのみさずといふ事なし。にしきをきて古里にかへるといふこの人の事也。⁽⁸⁾

朱買臣に関する本来の物語は既に明確になったため、ここにおいて、違う部分のみ述べたい。まず、妻が離縁を要求する部分である。ここは「かぎりなくまづしきすまひをたへがたく」思っていたので離縁を言い出したとある。『漢書』では、(1)に当たり、単に貧しいのみならず、朱買臣が薪を負い歩きながら大声で歌うことを「はじる」という部分は省略された。次に、出世の年齢について

(8) 小林保治訳注、『唐物語全訳注』、講談社、2003年、P266 - P267。

は(2)のように五十と明記せず、また「ことしばかり」、つまり来年に出世するとなっている。また、「こひかなしめ」「なをありし妻の事を心にかけて」などと、離れた妻への思いが色濃く描かれる。二人の再会について、「かりしあそびける時、事もなのめならず、あやしくわびしげなるしずのめが、かたみといふ物をひぢにかけて、なをつみてゐざりありくを」と、『漢書』の(6)と違い、再婚せず独りで貧しい生活を送っているなか偶然に買臣と会ったとある。そして(8)の官舎に泊めてもらった一か月後に自害する部分に対し、「我あやまつ事もなきに」と、初めは貧しい朱買臣から離れることを過ちとは考えなかったが、朱買臣と語るうちにそれを過ちであると悟り、後悔の念に責められて翌朝死んでしまうようになっている。最後の部分に和歌があり、最後まで貧しさを耐えていけば一緒に「にしきをきて」帰郷できたのにとある。

『蒙求』古注の「予年卅當貴、今卅九」は、『唐物語』の来年、「ことしばかり」の記述と合致している。ゆえに『蒙求』古注の影響を見逃せない。だが、『唐物語』の場合は、全体として、朱買臣の離れた妻に対する思いが大々的に描かれ、特に、『蒙求』の正文にある「買妻恥醜」の「恥」も「醜」も見えない。最後の和歌では、朱買臣が「衣錦帰郷」の男を強調すると共に、その妻が悔い死を選んだ理由は、やはり貧しい朱買臣を捨てその富貴を得ることができなかったことを間接的に批判している。「にしきをきる」は出世よりも、朱買臣が貧困な男から裕福な男へと変わったことを表わしているのである。『唐物語』のなかの買妻にとって、朱買臣が道で大声歌うことなく、自分も再婚をしないので、特に「はじる」必要はない。自分が過ったのは最後まで貧しい朱買臣と添い遂げることができなかったことであり、しかし朱買臣が一生に貧しいわけではなく、自分が離れてから独りで貧しい生活が続いている間に富貴になってしまうことである。それに対して「恥」よりも確かに「悔」のほうが適切であろう。

『唐物語』をはじめ、以降にも妻の「悔」を描く作品が見える。浅井了意『新語園』巻二の十三は「朱買臣妻」であり、出典として作者本人が「本傳」と記していることから、『漢書』の伝のことを指していると思われるが、実は内容には相違が見られる。

朱買臣、字ハ翁子トシテ云ケル。嘗テ貧乏ナリ。薪ヲ賣テ、行常ニ書ヲ誦ズ。妻是業ニ疎ナルコトヲ怒テ、暇ヲ取りテ出テ還リ。亦タ佗ノ夫ヲ求メテ世ニ住巨ル。買臣ハ特身ニ成テ、路ヲ行、歌フ。妻、乃チ後ノ夫ト家ニ在テ、買臣カ飢疲レ凍テ衣薄ヲ見ル。後ニ買臣、學問至リテ會稽ノ太守ト為リ、駟馬ノ車ニ乗り、高蓋ヲ擎テ吳郡ノ界ニ入ル。故ノ妻ト夫ト、道ノ掃治ヲ致シ、沙ヲ蒔キ、水ヲ洒ク。買臣、車ヲ留メ、夫妻ヲ後車ニ載テ、會稽ニ連テ往キ、家ノ園ニ置テ、食ヲ給シテ養ナフ。妻、恥悔テ、一月ハカリノ後ニ、自ラ經テ死ス。⁽⁹⁾

ここでは、妻が朱買臣から離れたことについて(1)の離縁の理由を述べずに、「妻は業ニ疎ナルコトヲ怒テ、暇ヲ取りテ出テ還リ。」と、朱家より逃げ出したという。また、妻の死に(8)の一月経って自害したに理由を加えて、「恥悔」とする。「恥」は直接『漢書』ではなく、間接的に『蒙求』などの中国文献から取り入れた⁽¹⁰⁾が、「悔」の場合は『唐物語』など、日本自らの文学に遡ると見るべきである。

『蒙求和歌』に「買妻恥醜」が入っている。『蒙求和歌』とは、室町時代に源光行が『蒙求』から標題を取り、説話文を加え、最後に和歌を付けて出来た作品である。その説話文は主に『蒙求』の古注、特に李瀚の自注を和訳したものであり、『和訳蒙求』とも称される。だが、説話文には多少作者によるアレンジが見え、物語の性質を持っている。『蒙求和歌』において、「買妻恥醜」が恋部に入っており、説話文は以下のようなようである。

朱買臣、モトハ會稽ノ人ナリ。家マヅシクテ、文道ヲコノミタシナムコ

(9) 浅井了意作、吉田幸一編集、『新語園』上、寛文12年刊本影印、古典文庫、1981年。

(10) 花田富二夫氏はこの段が『天中記』一九「棄夫」によると述べ（『新語園』と類書一了意読了漢籍への示唆一）、早川光三郎氏は『蒙求』と出典も同一記述内容もほぼ同一であると述べている（『蒙求の影響ノート（続二）』）。ゆえに、筆者は『蒙求』のほうにより影響がはっきりしていると考え、早川氏の意見に賛成する。ここに『天中記』の原文を記しておく。「朱買臣。字翁子。嘗賣薪樵。行且誦書。妻羞之。求去。其後買臣獨行歌道中。故妻與夫家上墳。見買臣飢寒。呼飯食之。及買臣為會稽太守。入吳界。見故妻夫妻治道。買臣駐車。呼令後車載其夫妻到太守舍。置園中給食。居一月。妻自經死。（東洋文庫蔵本『天中記』より、陳耀文纂、屠隆校）」

ト、オコタルトキナシ。ソノヒマニハ、タキギヲコリテゾ、ヨヲワタリケル。

買臣ガメ、ヨノワビシサヲタヘカネテ、イトマヲコヒテ、ワカレナムトイフヲ、「ワレ、四十ヨリトミサカフルコトアルベシ、スデニ卅九ニナレバ、コトシバカリヲマチミヨ」トネムゴロニイヒコシラヘケレドモ、キカズシテサリハナレニケリ。サスガニトシゴロニモナリニケレバ、トニカクニシタハシクオモヒケレドモ、《かひも》ナシ。

サテ次ノトシ、買臣ガ文道ニカシコキコトヲホメテ、武帝、メシテ、マヅ侍中ニ拜シテ、次ニ会稽ノ大守ニウツサレヌ。「富貴ニシテ不帰故郷、如衣錦夜行。汝、今スデニフルサトニ至ルベシ」トキコエケレバ、ヒザマヅキテカシコマリケリ。任ニオモムクトキ、サキノメ、アヤシノシヅノスガタニテ、ミチヲツクリケリ。コレヲミルニ、メモクレココロモキユル心地シテ、ヨビテミレバ、イフバカリナクヤセオトロヘテ、アリシニモアラズナリニケリ。女、ハジメハオモヒモヨラザリケリ。ヨクヨクカタラヒワタルママニ、昔ノ買臣トオモフヨリ、ハヅカシサノアマリニ、タフレフシテ、ヤガテシニニケリ……

そして、文末の和歌は

マテトイヒシ ハルニモアハデ アレニケル ノチノ心ハ ハヅカシノモリ⁽¹¹⁾

とある。

まず、「四十ヨリトミサカユルコトアルベシ、スデニ卅九ニナレバ」という、『蒙求』の古注と同じで、年齢のずれが見える。だが、古注の「如衣『繡』夜行」と違い、ここは「如衣『錦』夜行」となっていて、次の「今子如何（今あなたははどうする）」も「汝、今スデニフルサトニ至ルベシ（あなたは今帰郷すべき）」になっている。ここは源光行のアレンジと判断できる。また引用の説話文の最後は、恥じて死ぬところは『蒙求』古注と変わらないが、死ぬ前の妻の気持ち、

(11) 章剣校注、『蒙求和歌校注』、溪水社、2012年、P210 - P212。

考えなどを加えている。『蒙求和歌』の説話文においても、買妻の再婚は明記していない。また、『唐物語』と同じく、再婚ではなく裕福になった朱買臣をその貧しいときに捨てて、一緒に裕福になれなかったことが自害する理由となっている。それを、朱買臣談の中国に見えない第⑤類、元妻が貧しかった朱買臣の富貴を見て恥じて／悔いて死んだ話に数えられる。

作品成立の順から言うと、再婚よりも、裕福になった朱買臣を見て恥じるのは、『唐物語』による影響も考えられる。またそれは、朱買臣と「衣錦」とが余りにも強く結びつけられるからであろう。散文のみならず、和歌や俳諧にも、「衣錦」を朱買臣と関連される例が見える。

『古今和歌集』に次の歌が見える。

北山に、もみぢ折らむとてまかれりける時に、よめる 貫之
見る人もなくてちりぬる奥山のもみぢは夜の錦なりけり
(『古今和歌集』 297)⁽¹²⁾

また、『後撰和歌集』に次の歌が見える。

男につかわしける
思へどもあやなしとのみ言はるれば夜の錦の心ちこそすれ
(『後撰和歌集』 623)⁽¹³⁾

以上の2歌について、はっきりした解説が見つからないが、『後撰集正義』巻第七・秋下に、

紅葉、を分つ、行は錦きて家にかへると人やみるらん 読人不知
着錦帰故郷といふ事。朱買臣か時よりいへる詞也。朱買臣漢武帝為師範。
至會稽大守。其時帝云。福貴不帰郷。着錦如夜行云々。くはしく見古今秋

(12) 新編日本古典文学全集本『古今和歌集』、小学館、1999年、P132。

(13) 新古典文学大系本『後撰和歌集』、岩波書店、1990年、P180。

歌注。

往年治承之比。古今後撰兩集。受庭訓之口傳之後。嘉祿年八月之比。記別紙給之由見彼奥書。⁽¹⁴⁾

と、はっきり「にしきき」るを朱買臣に関連する詞と解説し、後撰集よりも前に既に古今集の時代よりあったと、以上の引用から分かる。「しにきをきる」を用いて、地面に満ちた紅葉の落ち葉を表わすことは従来から多用され、『古今和歌集』297番はそのま紅葉を用い、人の見えない奥山にあるので、まるで夜に着る錦であるという。『後撰和歌集』623番は従来の実在の紅葉を比喻するのと違い、相手に見えない恋心を夜の錦に喩えているのである。

時代が下ると、歌のみならず、俳諧にも、

着るや山の錦の色も朱買臣⁽¹⁵⁾ (『犬子集』2275)

と、貞門俳諧には、山を彩る紅葉を、山を覆う錦に喩えて、朱買臣と結びつけている例が見える。

また、蕉門の昇角『和漢文操』巻之六「徳利論」に

たとひ買臣が錦手にほこるとも、素生は美濃の山家より出て
『漢書』「上拜朱買臣会稽大守曰。富貴不帰古郷。如衣錦夜行」⁽¹⁶⁾

と『漢書』朱買臣の伝を引いて、朱買臣と錦との関連を解説している。

おわりに

以上、『漢書』朱買臣の伝を基に、日中両国の文学作品を例を挙げながら、時代と共に朱買臣と関連する話の受容と変容をまとめてみた。両国において朱

(14) 『続群書類従』第十六輯下、和歌部より。

(15) 『貞門俳諧集一 犬子集』、集英社、1970年。

(16) 『和漢文操』、集英社、1970年。

買臣にまつわる話は主に以下の5種類に分けられる。

- ①薪を負いながら勉強する話
- ②晩年出世の話
- ③衣錦帰郷の話
- ④元妻が再婚を恥じて自害した話
- ⑤元妻が貧しかった朱買臣の富貴を見て恥じて／悔いて死んだ話

そのなか、①のみは『漢書』に元々あるから話であり、②③④は中国で後世アレンジして作り出された話である。⑤は日本文学のなかの和文学に見える話であり、さらにそれは③の「衣錦」を出世よりも「富貴」に解釈したうえでの結果である。「衣錦」が特に和文学のほうで重要視され、朱買臣と結びつけ、散文のみならず、和歌や俳諧まで影響を及ぼしている。それはそもそも和歌に紅葉を「錦」に喩えることとも関係しているが、その「錦」を「着る」、特に「夜の錦」の場合、朱買臣と関連していることは否定できない。

本稿において、まだ不十分な点もたくさんあり、特に日本文学において、「衣錦」がなぜそれほど愛用されているのか、また、「恥」を「悔」に変えるのはなぜなのかについて見当はまだついていないので、今後もより深く研究をしようと思う。

参考文献

論文

- [1] 池田利夫、「唐物語と蒙求—蒙求和歌との関連に於いて—」、『鶴見女子大学紀要』第5号、1968年。
- [2] 早川光三郎、「蒙求の影響ノート」、『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学』第13・14・15・19号、1963年～1969年。
- [3] 早川光三郎、「蒙求論考：蒙求Power・自序自注・蒙求抄諸本を主として」、『滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学』第20号、1970年。
- [4] 岩井茂樹、「二宮金次郎『負薪読書図』源流考—『朱買臣図』からの展開—」、『日本研究』、2007年第9号。
- [5] 章 劍、「『蒙求和歌』における漢故事の受容—恋部を中心に—」、『中国中世文学研究』、2007年第52号。
- [6] 王 川、「流変與書写：日本文学対朱買臣故事的受容研究」、『学术界』、2015年第1期。

著書

- [1] 早川光三郎、『蒙求』上・下、明治書院、1973年。
- [2] 長澤規矩也、『和刻本類書集成』第三輯、汲古書院、1977年。
- [3] 池田利夫、『日中比較文学の基礎研究—翻訳説話とその典拠—』補訂版、笠間書院、1988年。
- [4] 池田利夫編、『蒙求古註集成』上・中・下・別巻、汲古書院、1988年～1990年。
- [5] 小林保治、『唐物語全釈』、笠間書院、1999年。
- [6] 章 劍、『「蒙求和歌」校注』、溪水社、2012年。